

「伝わるからだ」の探究③

釋 一 祐

○伝わらない原因としての肉体的問題

この伝わるからだの探究は当初より教化の為の課題であり、また、現在宗教界が抱える問題を解消する上での一つの方法として探究してまいりました。いわゆる寺離れに対する、対症療法的ではなく抜本革新的取り組みであります。「伝える」という行為における近代的欠落を特定し、その改善策を共有することで、寺離れ問題を宗教者の成長を通して解決していこうという方向性であります。

その①では「ことばと心と動作の一致」、つまり「伝える者」においての身口意の三業不相応は聞く者に不信を抱かせる。その②では「呼び覚ました五感是他者へと伝わる」、なによりも「情緒」が伝わるのが重要と解りました。この二つの探究を通して新たに見えてきた課題が二つあります。一つは内面の問題で、「自我」をどう成長せしめるか。もう一つは意外にも肉体的問題として、「伝わりにくいからだ」を形成してしまう事実が日常生活の中にあるという課題であります。

今回は、この「伝わるからだ」の形成を妨げる肉体的問題についての探究を致します。

○食べることもエネルギーを消費している

我々が、日常的に見落としてきたことは、「摂取するということはエネルギーを消費する」ということです。体力を使うから沢山食べておかなければいけないと思うのは、「車が走るにはガソリンが満タンでなければいけない」との混同で「人体を機械的に見ている」判断であって、実際には消化にこそエネルギーが使われています。たとえば牛や豚の肉を消化するには約一カ月を要し、鳥肉であれば二週間ほど、植物性のものであれば三、四日以内、玄米は二十四時間以内に消化され排泄されます。ちなみに白米は消化に時間がかかります。ただし、人種民族によっても違いがあります。やはり何千何万年と生きてきた生活環境によって、持ち合わせる消化酵素にも違いが出てきております。ところで、果物から摂取する糖質、いわゆる果糖は、他の糖質とは違って、すぐにエネルギーになります。これはかつて木の上で暮らしていた時代の主食が果物であったことに由来します。そうかと思えば前述の通り肉食には消化に長い時間がかかります。消化力を高めるといふ課題を目的としない限り、現在の自分の消化力にあった食生活を見つけることが、思考力や感受性を高めるための課題となります。

「伝わるからだ」を具え、また維持していくには食生活についても考えなければならぬことが解ってきました。「沢山働くには栄養価の高いものを沢山摂取しなければならぬ」という食に関する認識に注目し、「エネルギー補給のために食品等を摂取するが、その食品等を消化するのにエネルギーを浪費している」という概念を持たなければなりません。

○食べたものは自分になる

近代が生み出した食についての具体的問題をあげれば、まず食用油であります。人体の約七割は水分であることは

よく知られていますが、その他はほとんど油であります。人体を形成する約三〇兆の細胞の細胞膜も、神経組織も油を主な成分としています。脳細胞は特に油成分を多く必要としています。

一方我々のもとに届けられる食用油の品質問題が昨今ようやく話題にされるようになりました。「トランス脂肪酸」という人工的に作られた食用油が人体に及ぼす影響は甚大です。この油によって形成された細胞は非常に劣悪なものになり、成人病を引き起こす要因となっています。

つまり、我々人間の本質的構成要素である精神の働きを具現化する身体の、物質的資質が劣悪であることは、外部からあらゆる情報を取り入れる活動においても、精神を明確に表現しえる成果をも大きく左右します。

アメリカのニューヨーク市は、このトランス脂肪酸を使用した食品販売業者は営業停止とする条例を施行しています。隣国、韓国や台湾では、このトランス脂肪酸を使用する場合は必ず内容物として明記することを義務付けし始めました。現在日本では、この油は野放しな状態なので、個人が自己管理によって自分や家族を護らなければなりません。参考までに、このトランス脂肪酸を避けるための食品選別について申し上げます。この脂肪酸は食品の内容物に「植物油脂」と明記されています。また、植物油・パーム油、さらにはマーガリンやショートニング、そしてファストフードやスーパーのお惣菜コーナーで販売されている油ものはすべてこの植物油脂由来の食用油で調理されています。

逆に、身体において良質の油について申し上げます。現代人に最も不足している油が「亜麻仁油」「えごま油」などに含まれています。ただしこれらは非加熱でなければいけません。

各種栄養を摂取する時間については、昼食に炭水化物、夕食にはたんぱく質をそれぞれ主食とすることが身体の一日の循環代謝にふさわしい食生活となります。朝食はなるべく消化力を要しないもの、直接エネルギーとなる果物などは最適です。なぜなら午前中は身体に取り込まれて滞っているあらゆる物質を排泄することにエネルギーを集中させることが健全な身体を維持するための肉体的課題となるからです。

注目すべきは、「肉体は食べたものによって造られている」ということです。

○病気の認識とその治療法における問題

もう一つ、食品と共の注意しなければならないのは「医薬品」であります。現在用いられている医薬品は、本来体内で作りに出すべき物質を外部から直接摂取することで、疾患を改善するという方法をとっています。そのため、本来必要な物質を自ら生成するべき身体の自己組織性が退化し、自ら生成する能力を失います。

また、体内で生成されれば全く副作用がない物質も服用という形で摂取することで必ず大なり小なり副作用が起きます。

○日蓮聖人の教えにおける身体の重要性を考える

我々は近代社会に生きていることで、つい「機械をお手本にして人体を見てしまふ」という過ちを犯しがちです。機械的価値観から有機的価値観への移行も健全な精神と肉体を保障し健康な生活へと万民を導くべき宗教者としての課題であろうと考えます。

健康とは、身体的健康だけでなく、感情的にも精神的にもそして魂の健康と、この四つの健康が満たされてはじめて健康であるといえます。そこにこそ健全な生活、健全な学校、健全な職場が保たれます。近代において新たに生まれた問題である、食品質の問題は「心」や「たましい」をテーマとしてきた宗教者においても、特にその中でも「具現化」を課題とされる日蓮門下の我々にとっては見過ごせない事実であります。

○近代において分離分割された人体

また、これら近代の食品および医薬品における問題は、身体領域ばかりでなく感情や精神の領域での病の要因ともなっています。「薬による病気」「自然治癒力の喪失という副作用」「対症療法による病の悪化」「細胞機能の低下による慢性病」これらが進行することは、感情や精神の領域における病を引き起こすこととなります。

現在、近代的医療においては、残念ながら身体と感情と精神、そして魂の関係性は断絶されて、身体的病から感情や精神的病へと発展するという考え方はしません。しかし、はたしてそうなのでしょうか。少なくとも我々宗教者の立場で人体を観る時、それは一体な存在であって、常に流通循環しているものと考えるのが自然です。

○統合補完医療から学ぶ本来の人体認識

補完医療、統合医療という医療の分野における常識としての理論を紹介し、このことについての課題を見つける糸口を探求いたします。

そこで認識されている人体には、明らかに一つの序列があるということです。まず精神の領域、感情の領域、身体の領域があり、単純に人体における症状（疾患の警告）は、はじめに身体の領域に発せられます。身体の中でも生命の危機から遠いところから発せられます。そこで何ら改善がなされないと、その警告はだんだんと生命維持に深刻な問題をきたす部位へと移っていきます。これが単純な序列です。つまり、生命維持に深刻な問題を及ぼす上での「軽重」が秩序となっています。ですから、仮に精神性よりも身体的疾患のほうが軽いといった基本概念があっても、心臓病や脳障害のほうが、感情領域における恐怖症や精神領域における無気力や記憶力の欠如よりも重いわけで、単純なものではありません。（ここで注目すべきは、表面的症状を消してしまう対症療法は単に病を深刻化させているだ

けとなります）

現在もう一つの医学として発展してきたこの統合補完医療の分野においてはあらゆる病における症状の移行の法則が臨床研究によって進み、実用化されております。つまり、人体の健康を維持する医療の現場にて因縁果報の法則に則った施術が行われ始めています。

これはかつての修法道の先師が用いて人々の日常的問題を解決せしめ、それを通して教義教学にある思考価値観を信受せしめる足掛かりとしていた、古来の伝統的教化方法ではないでしょうか。

ホメオパシーという療法においては、「同種療法」と呼び、病の原因となっている物質と同じ物質の電磁波エネルギーが、その病を治癒せしめる。つまり、病によって起きている症状を観て不足している物質を摂取せしめる近代対症療法からは治癒（症状を消すのではなく完治）は得られず、病の原因である要素と同じ物質内の電位（宗教学における魂）を起すことで人体は健康を取り戻す。との理念であります。私は、これは常不輕菩薩の化導法に類似した理念であると考えます。

最後に、症状の移行についてご紹介いたします。

病が治癒へ向かう時、内から外へ・上から下へ・生命維持にとって重要な器官から軽い器官へ・発症した時と逆の順序、つまり一番初めに発症した症状が最後に消える。

まずもって、身体のみならず、感情や精神に病があり、そして生活に家庭に病あり。職場や学校といった組織に病あり。人生に、時代に病あり。と考え、日蓮聖人の「病」という言葉を読み直さなければなりません。

現代病ともいべきこれらの病は、社会的俱業である「謗法」から生まれ、現代においてはそれが「人と自然を機械を観る様に認識してしまう」という思考の病となって世界を覆っています。現代病の殆どは人為的問題によって起きています。

参考文献

このレポートはアメリカの脳外科医であり、世界各国で統合医療のティーチャーオブティーチャーを勤める、ホメオパシーの専門家ロバートハシンガー氏。最先端の栄養学、食物学の専門家であり料理人であり、整体指導者である南清貴氏への聴き取りをした内容を中心に左記参考文献同著者その他の書物を参考に述べたものです。

サイエンス・オブ・ホメオパシー クラシカルホメオパシー オルガノン 究極の食 タオの自然学 ヒポクラテス全集
医学の歴史 整体入門 背く子背かれる親 健康生活の原理